



ブラジル

派遣期間 2015年4月～2018年3月

# サンパウロ日本人学校 実践報告

～ 日本とブラジルの架け橋になれ ～

旭川市立東明中学校

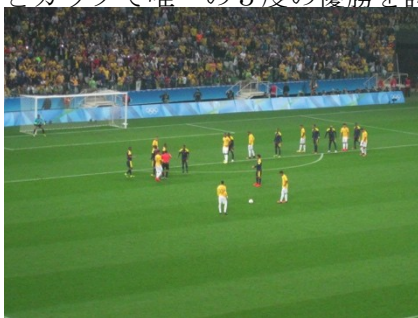
教諭 久保田 竜平

## 1 ブラジルについて

ブラジル連邦共和国（República Federativa do Brasil）は、南米大陸で最大の面積を有する。国土面積は8,511,965km<sup>2</sup>で日本の約22.5倍（世界第5位）である。ウルグアイ、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ペルー、コロンビア、ベネズエラ、ガイアナ、スリナム、フランス領ギアナと国境を接している。人口2億0768万人（2017）で世界第5位。地域的には五つに分かれ、それらの地域は26の州（Estado エスタード）と1つの連邦直轄区（首都ブラジリア）から構成されている。2016年のGDPは1兆7986億ドルであり、経済規模は世界9位、南米では首位である。



### ブラジルと言えば…



サッカー、サンバ、アマゾンの大自然、コーヒーである。サッカー大国であるブラジルは、ワールドカップで唯一の5度の優勝を誇る。クラブチームも名門・強豪が多く、国民のサッカーに対する情熱は凄まじいものがある。クラブチームの試合後には、暴動が起こることも多々ある。ブラジルのサッカーが強い要因として、公立学校が午前で終わり、午後からたっぷりサッカーに打ち込める環境があることがあげられる。TVで見るような裸足でサッカーをする姿は本当によく見られ、ファベイラ（貧困街）からスターを夢見て、サッカー選手を目指す子どもたちも多にいる。

リオのカーニバルは世界的にも有名である。1チームのパレードの時間は、80分もある。その間、踊り子たちは踊り続け、バテリア隊という演奏メンバーも80分間、同じリズム・テンポで演奏し続けなければならない。1年前から、練習はスタートし、山車や衣装は全て手作りである。厳しいオーディションもあり、サッカーと同様に、子どもたちから憧れるものとなっている。ブラジルでは、“エスコラ・ジ・サンバ（サンバの学校）”と言われ、各チームがサンバを通し、子どもたちと大人たちが一緒になり、一つの音楽を創り上げていく。それはまさに“学校”そのものである。ブラジルにとってサンバは、教育の一環であるのだ。



アマゾンの大自然もブラジルを象徴するものだ。世界の全河川の3分の2に当たる水量を誇り、地球上の酸素の3分の1を供給している。広大な大自然の中で、絶滅危惧種の動物たちも多く存在している。

コーヒー豆生産量は、全世界の3分の1を占めている。現在まで約150年間世界一の生産量を誇っている。ブラジルでのコーヒーの飲み方は、濃い目のコーヒーを小さなコーヒカップで飲むのが一般的。または、ミルクと混ぜたり、砂糖をたっぷりを入れて飲む。朝昼晩、いつでも飲む。

## サンパウロについて

サンパウロ (São Paulo) は、ブラジル南東部に位置するサンパウロ州の首府で、市の人口は1,100万人以上。近郊を含む都市圏人口は2060万人で世界第10位である。標高800mにある南米最大、ブラジル最大の商業都市である。日本をはじめ各国の企業が進出し、駐在員の数も多い。ブラジル経済の70%はサンパウロ州が占めている。気候や土壌、地形に恵まれているためコーヒー生産も盛んである。日本と緯度が近く、日系人の多くはこの州に住む。気候は、夏の12月～2月は30℃を超える暑さが続く。夕方には、スコールが降り、涼しさを感じる事ができる。スコールの影響で、よく停電したり、道路に川の水が反乱したりすることも多々ある。冬の6月～8月は、15℃くらいで非常に住みやすい環境となる。



サンパウロと言えば、やはり治安の悪さだ。貧富の差が非常に激しい。ブラジルを理解するためには、富裕層の生活と貧困層の生活の両方を知ることが大切である。お金持ちの中には、ヘリコプターを所有し通勤している。ヘリコプターの個人所有は、ニューヨークを抜いて世界1位である。一方で、サンパウロの街には、ファベイラという貧困層の人々が暮らす地区がある。

ホームレスも多く、強盗も頻繁にある。殺人事件は年間約3500件、ピストル強盗は年間約40万件である。ピストル強盗に関しては、日本の約500倍である。(H29サンパウロ日本人学校領事館安全研修より)





## 日系移民について



ブラジルを語る上で、日系移民の存在は必要不可欠である。3年間の在外派遣生活の中で、日系の方にどれだけお世話になったか、感謝しかない。1908年、神戸港から日本人781名を乗せた笠戸丸がサントスへ向けに出発した。これが第1回目の移民である。約50日かけてサントス港にたどり着いた。ブラジルについての生活は、想像を超えるものだった。コーヒー園の働き手として、朝から晩まで奴隷のように働かされた。真面目な日本人は、一生懸命に働いたが、ブラジル人は日本人に対して「Japones Garantido (ジャポネイス・ギャランティーンノ：日本人は信頼できる)」と言って、その働きぶりを皮肉った。しかし、それ

でも日本人は、真面目に働き、いつしかブラジル人から本当に信頼されるようになった。日本人は、子どもたち(2世、3世)に教育をしっかりと行い、医師や弁護士などに育て上げ、日本人がブラジル社会で生きていけるようにした。今では、ブラジルの大学であるサンパウロ大学の40%を日系人が占めている。また、日本から運んできた野菜の種をブラジルの地で育て、ブラジルに野菜を広めた。それまで、ブラジル人はあまり野菜を食べる習慣なかったようである。かつてブラジルには、「りんご」がなかったが、現在では消費量・生産量共に世界第5位のシェアを誇る。日本人は「野菜の神様」と呼ばれ、現在のブラジル食文化へ大きな影響を与えたもしかするとブラジルは、日本よりも“日本”を感じる場所かもしれない。



## 2 サンパウロ日本人学校の特徴

サンパウロ日本人学校は、全校約200人小学部1年から中学部3年までである。単級全9クラス。1クラス15~35人程度。1年間で全体の1/3にあたる60名~70名が編入、かつ退学する。転出入が非常に激しい。職員員構成は、校長、教頭各1名。日本からの教諭15名。学校採用の教諭4人。養護教諭1名。事務4名、労務員3名、警備6名などである。コーヒーだけを入れる仕事をしている方もいた。サンパウロ市中心部から南西に20kmほどのCampo limpo地区にある。この地区は、市内でもトップクラスの治安の悪さ。校舎は築44年。東京ドームの約2.5倍の広さ。H29に創立50周年を迎えた。通学方法は、12台の中型バスで送迎している。片道40分前後である。





施設は充実していて大運動場、サッカーコート、プール、広場教室、コーヒー園、バナナ園などがある。全教室には、治安の関係上、鉄格子がついている。敷地が広いので、教室間の移動には時間がかかる。運動不足が課題である子どもたちにとっては、走り回ることができる最高の環境である。

## ブラジルならではの取組

敷地内は、まるでジャングルのように自然に囲まれている。バナナ園やコーヒー園があり、行事として、コーヒー狩りなどを行っている。音楽の授業では、サンバを習う。ブラジルの指導者に来てもらい、 bateria (楽器) の練習をしたり、プロのサンバダンサーを招き、サンバの練習もする。総合の学習では、ポルトガル語やブラジル文化についての学習を小1から中3まで週1時間行っている。ネイティブスピーカーと話す英会話の授業も小1～中3まで週1時間行っている。他にも総合の時間には、ビバカン！という世界で活躍する方々を招き、講話や授業をしてもらう。



## 2大行事



2大行事である運動会とカンポリンゴ祭がある。運動会では、紅白ではなく黄団・緑団に分かれ、熱い戦いが繰り広げられる。カンポリンゴ祭では、午前の部に低中高・中学部の舞台発表があり、午後の部では、全校でサンバを行う。2つの行事もとても盛り上がり、保護者の期待値も非常に高い。



## 各学年の行事も盛り沢山

- ・ 小1・・・遠足、近くの小動物・農園訪問
- ・ 小2・・・サンパウロ水族館(買い物体験), CORREIO(郵便局)見学・手紙投函体験
- ・ 小3・・・スーパー見学、大規模農園見学





- ・ 小4・・・浄水場見学、消防署見学
- ・ 小5・・・自動車工場(トヨタかホンダを隔年で),放送局(現地 Band TV と NHK ブラジル支局)見学近くの町(70km 離れた Atibaia)で宿泊学習。
- ・ 小6・・・修学旅行(飛行機で 1000km 離れた首都ブラジリアへ),移民資料館,老人介護施設訪問
- ・ 中学部・・・1泊2日の宿泊学習。1.2年生は2日間の職場体験学習。修学旅行(2年。パンタナール)



## 英語科としての仕事

### 授業（英語教師としての試される力量）

日本人学校に集まる生徒は、保護者共に学習に対する意識が高い傾向にある。授業参観では、保護者の出席率は、毎回100%である。しかも両親で来ることがほとんどだ。そのため、教室は当然のごとく満杯になり、高学歴の保護者の目が光る。特に英語は、中学部に入学してきた段階で、クラスの半分以上が英語を流暢に話す。2級を取得して卒業する生徒が多く存在する。中には、英検準1級、TOEI985点の生徒もいた。もうすでにネイティブである。その中で、どうやって生徒に更なる“英語力”をつけさせるか、毎回2人のALTと打ち合わせをし、様々な工夫をこらし、実践した。教科書をしっかりと行いながら、即興スピーチ、ディベート、長文のライティング、CM作り、映画作りなど発展的なことも行った。特に大事にしたことは、英語を活用させる場面をふんだんに取り入れることはもちろん、相手を意識させながら、コミュニケーション能力を磨いていった。声の大きさ、目を見る、相手の英語を共感的に聞く、伝えたいことをいかに心を込めて伝えるかに焦点を当てた。そうすることで、「ただ英語をベラベラと話す」ことから「相手のことを考えた“心ある英語”を発信できる」ようになってきた。



英語の授業以外にも、「英会話」の授業も行った。少人数（4～6人）に分かれ、50分間、英語を使い続ける授業が展開する。ビギナークラスでは、その日のトピック（場面）を設定し、その場面にあった英語を教え、トレーニングやゲームを通して、会話をしていく。聞く話すを中心とする。上級クラスでは、まとまりのある英文を読み、Question and answerを行ったり、そこから自分の意見を言わせたりしている。人数が少ない分、英語を使う機会が多く、週1回ではあるが、生徒にとっては英語のSpeakingとListeningのスキルを上げることができる授業となった。JETはコーディネーターとなり、グループ編成やALT2人と授業内容を打ち合わせする。JETも英会話の授業を行った。

英語の授業以外にも、「英会話」の授業も行った。少人数（4～6人）に分かれ、50分間、英語を使い続ける授業が展開する。ビギナークラスでは、その日のトピック（場面）を設定し、その場面にあった英語を教え、トレーニングやゲームを通して、会話をしていく。聞く話すを中心とする。上級クラスでは、まとまりのある英文を読み、Question and answerを行ったり、そこから自分の意見を言わせたりしている。人数が少ない分、英語を使う機会が多く、週1回ではあるが、生徒にとっては英語のSpeakingとListeningのスキルを上げることができる授業となった。JETはコーディネーターとなり、グループ編成やALT2人と授業内容を打ち合わせする。JETも英会話の授業を行った。



## インターナショナルスクールとのやり取り（進路）

駐在員の仕事柄、転勤が多く、日本に帰らず、他の国に“横移動”することが多々ある。その他にも、ブラジルにあるインター校に行く生徒もいる。そのため、生徒の進路の一つにインター校がある。英語教師は、推薦状を書くなどインター校とのやり取りもしなければならない。3年間の中で、20名以上の推薦書を書いた。なかなか大変な仕事であった。ちなみに、ブラジルのインター校を視察したので、紹介したい。以下、セント・ニコラス校の紹介。

### <特徴>

生徒は、ブラジル人、アメリカ人、イギリス人、日本人、韓国人、中国人など様々。教員の出身国も様々。ホームルーム（クラス）がなく、自分の履修すべき授業に参加するスタイルである。授業は全て英語で行われている。※英語以外の言語は、その言葉を用いて行っている。

### <授業例>

英語：生徒が本を読み、教師が英語で質問していく。（Question and answer）3つの授業を見たが、どれもその形であった。テキストを使いながらGrammarの授業もある。

生物：一人一人が動物の歯の形・特徴を調べ、パワーポイントを使い、英語で3分程度のプレゼンをしていた。

科学：原子記号のテストを行っていた。知識を定着させる場面もある。

数学：ホワイトボードの机に、数字や図を描きながら、グループで協力しながら課題を解決していく。

日本語：授業は日本語で行われ、生徒も日本人。写真を見せて、ここから何が感じられるか、各々意見を日本語で述べていく。

社会：大きなテーマがあり、各グループに分かれ、小テーマを決め、それを調べていく。1年かけて行っていくグループワーク。日本の総合的な学習の時間に似ている。

## 交流（国際理解を取り扱う大事な分掌）

サンパウロ日本人学校では、主に2つの交流が行われた。1つは、日本語学校（日系）との交流。もう一つは、現地校との交流である。特に日本人学校では、1つ目の日本語学校との交流に力を入れている。分掌の仕事として、本当にやりがいのあるものであった。

### イビウーナ日本語学校との交流

4月に中学部がイビウーナへ宿泊学習をする。その際、日本語学校との交流を行う。2世、3世の老社会の方々と当時の苦労話や日本人としてどのように日本の文化を伝えてきたのかなどグループになり、会話をしていく。また、日本語学校に通う児童生徒とは、日本の遊びをしながら、交流を行う「ブラジルにもう一つの日本がある」そんな気持ちを抱いた。



6月、運動会に招待し、競技などで交流する。50周年記念企画では、イビウーナ青年会に太鼓を叩いてもらい、会場全員を巻き込み500人で盆踊りを行



った。とても感動的だった。

<イビウーナ日本語学校について>



1948年設立。イビウーナに住んでいる日系の子ども達が午前中、ブラジルの現地学校に通い、午後に日本語学校で勉強している。設立当時は、日本の学校と同じ教科書を使って国語や算数を勉強していた。今は外国人向けの日本語教科書を使って日本語を勉強している。日本語の学習は、読み書き中心（指示は日本語とポルトガル語）。習字、体育、百マス計算、そろばんもしている。4歳から15歳までの子ども達が25名いる。教室に飾られている掲示物は、日本の歴史人物を詳しく紹介したものや日本の歴史について日本語でまとめられたものが掲示されていた。とてもきれいな字で質の高いものであった。日本人学校との交流も毎年行われている。

### グアタパラ日本語学校との交流

8月に小5～中3の中で、有志を募り、引率も含め約40名で5時間かけて、グアタパラにホームステイに行く。グアタパラは、日本移民発祥の地である。今では、野菜や養鶏、牧場で有名な場所である。そんな歴史ある場所に毎年、ホームステイをしに行くのだ。多くのおもてなしを受け、交流していく中で、日本や日本人について深く考えさせられる。心ある交流の中で、児童生徒は大きく成長する。



9月、カンポリンゴ祭に招き、日本の文化祭を体験してもらう。また、全校サンバで共に歌い交流する。彼らは、文化祭をとても楽しみにしている。これらの交流を通して、日本とブラジルの架け橋となる人材が育ってほしいと願う。

<グアタパラ日本語学校について>



日本人学校との交流が盛んで、30年以上の交流がある。毎年、日本人学校の児童生徒がホームステイでお世話になっている。日本語の教育を続けていく中で、日本の古き良き伝統や文化を継承している。課題として、日本語の必要感のなさも挙げられている。現実問題として、日本語を勉強するなら英語を勉強した方がよいと考える方も増えている。



## 現地校との交流

サンパウロ日本人学校では、現地校との交流も盛んに行っている。近くの学校に訪問したり、来てもらったりと毎年、2～3校と交流を行っている。内容は、スポーツ交流、学校紹介、アイスブレイク



などである。言葉がポルトガル語であるため、児童生徒はポルトガル語や英語を使って交流していく。ブラジル人は、本当に積極的でとても陽気である。日本人の児童生徒は、最初は照れがあるものの、徐々に積極的になり、別れ際には、ハイタッチをしたり、抱き合ったりする光景も見られる。



ブラジルという国は、移民国家であり様々な人種が混在している。そんな中で、日本から移民してきた日本人が、苦勞を重ねながら真面目に生活したことで、ブラジル人から尊敬されるまでになった移民の方々との交流を通して、日本人が世界で活躍するヒント、世界の人々と協働・共生できるヒントを感じ取ることができた。

## 中学部2年修学旅行（ブラジルを世界一熱く語る中学生になれ）



海外で旅行をすることになると、不安がつきものだ。ましてや、治安が悪いと言われているブラジルで修学旅行を行うということは、「奇跡」に近いことである。全員が安全に健康で旅を終えることが一番の我々の使命となる。“リスクを伴う南米”での修学旅行ということで、入念な下見、安全対策、リスクマネジメントは、何度も打ち合わせをし、保護者とも確認を行った。

その一方で、中学部の旅行先は、パンタナールである。この場所は、世界遺産に登録されている。世界最大の湿地帯であり、数多くの生き物が生息している。絶滅危惧種も多く存在しており、こんな素晴らしい場所に行けることも「奇跡」である。本当に学びが多い場所で、一生涯かけてもパンタナールを知り尽くすことはできないくらい豊かな自然で溢れている。世界中を探しても、



パンタナールへ修学旅行に行く団体は、サンパウロ日本人学校しかない。生徒たちには「パンタナールを世界一熱く語る中学生になれ」と言い、100日前から修学旅行の準備を始めた。修学旅行、2週間前にインフルエンザが流行り、危機的状況ではあったが、無事修学旅行を終えることができた。4日間のパンタナールでの修学旅行は、100日間の準備を超える

ほどの感動があった。最終日に夕陽と共に現れた絶滅危惧種で見るのがジャガーよりも難しいと言われているオオアライクイに出会った。忘れられないものとなった。生徒たちは、豊かな自然と深く向き合う中で、豊かな心を育むことができた。



## 4 ブラジルの いて)

治安の悪いサンパウロで  
ことができる。①キョロ  
ら歩く、③決して走っては  
④赤信号は無視してもよい、これら4つはブラジルで安全に生活していく上で大切なことであった。  
ブラジルで生活するためには、身の守り方を十分に知る必要がある。治安が悪い一方、ブラジル人は  
とても陽気でフレンドリーだ。笑顔でコミュニケーションをとっていくことで、受け入れられる。時  
間がゆったりと流れ、少々約束を守らないところもあるが、とても素敵で“優しさあふれる国”であ  
る。



## 歩き方（生活につ

は、歩き方一つで自分の命を守る  
キョロ歩く、②あいさつをしながら  
いけない（強盗に間違えられる）、

### 最後に…

3年間様々な体験を通して、多くのことを学んだ。ブラジルでの学びを北海道の子どもたちに還元  
していきたい。そして、地域を愛し、日本を愛し、他国を愛する“世界で輝く人材”を育てていき  
たい。今回の赴任にあたり多くの方々にお世話になった。感謝の気持ちしかない。根室国際理解教育研  
究会の皆様や上川管内国際理解教育研究協議会の皆様をはじめ、関わってくださった全ての皆様に心  
よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。